

木下長嘯子『挙白集』巻六「盆山記」および「月の宮人」読解

水上 雄 亮

はじめに

『挙白集』は巻一〜五までが歌集、巻六〜十が散文からなる十巻のテキストである。散文は基本的に歌文ないし詩的散文というべき文章からなるが、巻七以降はタイトルに「妙寿院につかわすことば」、「玄旨法院をいためることば」といった、特定の人物に向けられたと思しき文章が目立つ¹。

巻六冒頭の「山家記」についてはすでに上野洋三氏²と嶋中道則氏³の注釈があり、同じく巻六の「盆山記」については赤羽学氏の論考⁴がある。ただし、赤羽氏の論考は蕉門における長嘯子受容を論じたものであり、実質『挙白集』の散文で注釈的読解が行われているのは「山家記」のみというのが現状である。

そこで、本論では「盆山記」および「月の宮人」の読解を試みる。いずれもごく短い分量のテキストであるが、そこで描出される「自己」

のありようはかなり特徴的であり、『挙白集』を読む上で少なからぬ重要性を持っていると思われる。

本論でテーマとなるのは、テキスト上に表出する語り手の自己イメージである。もちろん、「語り手」としての自己を实在の長嘯子自身に重ねることはできない。だが、そこで語られる自己が長嘯子にとって表現されるべきものであったこともまた間違いない。本論は、いわば「内テキスト的存在」としての長嘯子の一側面を浮かび上がらせることを目的とする。

1 「盆山記」

「盆山記」で賞翫されている「物」は、その形状や色から、古典世界で著名な「廬山」の名を付与されている。「盆山記」というタイトルの通り、盆の上に山が乗っているオブジェなのだろう。ここで「かの瀑布」・「李白の詩のことば」といっているのは、李白の「望廬山瀑

布水二首」からの引用である。より直接の典拠と思われる「其二」の詩を掲げておく。

日は照る香爐紫煙を生じ

遙かに見る瀑布前川に挂るを

飛流直下三千尺

疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるかと

「紫煙」、「瀑布」といった語句が対応している。李白の詩句を媒介としつつ、「物」と「廬山」とが重ね合わされている。仮にこれを図式的に表現するなら、

物∥廬山

と記述できるだろう。

この図式に、語り手と「物」との大きさの相対的關係、および「所有者が被所有物を眺めている」という關係を「大小」の不等号によって表し、付加してみると、

語り手∨物∥廬山

と表現できる。これを、「語り手が自分の所有する「物」を眺め、そ

こに廬山のイメージを重ね合わせている」という關係の近似とする。

こうして喚起された廬山のイメージの中に、白居易が登場する。

「居易のぬし」（傍点筆者）という口ぶりからは、語り手の白居易に対する敬愛の情を感じとることができる。¹⁰ 一時期白居易は廬山に隠棲していたことがあったが、先と同様に両者の大きさの相対的關係、および「地域／居住者」という關係を「大小」の不等号で表し、図式に付加してみると、

語り手∨物∥廬山∨白居易

となる。¹¹ はじめ「物」を眺め、つづいてそこに「廬山」のイメージを思い描き、さらにその廬山に隠棲する白居易へと思いをはせている。（相対的に）大きな語り手から小さな「物」へ、そしていったん「物」が廬山に置き換えられ、巨大な廬山から（相対的に）小さな白居易へという様に、「大／小」の対比が繰り返されている。

ここで「なにの花の時、錦のとばりのもと、かやずしけん」といっているのは、白居易の「廬山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二員外」という詩からの引用である。¹² ここにその詩句を掲げておく。¹³

丹霄手を携ふ三君子

白髮頭に垂る一病翁

蘭省の花時錦帳の下

廬山の雨夜草庵の中

終身膠漆心應に在るべし

半路雲泥迹同じからず

唯だ無生三昧の観有り

栄枯は一照にして両ながら空と成る

中央で栄達する友人達との友情を語りつつも、「栄枯は一照にして両ながら空と成る」という句から分かるように強い無常観を打ち出している。白居易は、雨が降り注ぐ夜の草庵の中、栄えるのも落ちぶれるのも結局は同じことだと悟って、仏教的概念であるところの「空」を観じているのである。¹⁴

ところで、「柴のとぼそ」とは「柴で作られた粗末な扉」のことであるが、「とぼそ」はより本来的には「扉の回転軸である」「とまら」をはめ込むために空けられた穴」のことを指す。¹⁵ 実際、語り手は「回転軸のための穴」を見ているわけでも「扉」を見ているわけでもなく、むしろそれに代表させられた白居易の隠遁生活を見ているというべきだが、語句のイメージ連関として、「空」と「とぼそ（穴）」はその「欠如」において通じている。¹⁶ だから「柴のとぼそのありさま」というのは、白居易の隠遁生活のありようであると同時に、彼が観じたと

ころの「空」の象徴でもあるだろう。あるいは語り手自身も「空」の境地を（なにかは無意識的に）共有していて、それが「とぼそ」という対象への注視として表出されたと思われる。

さて、文章の最後に和歌が一首添えられている。

草の庵にあはれと聞し夜の雨はいまもたもとの雫なりけり

（草の庵の中で物悲しく聞いた夜の雨は、今も袂を濡らすしずくであることだ）

この「草の庵」・「夜の雨」は、明らかに先に引用した白居易の詩句を指している。つまり、かつて白居易が「空」を観じていた（あはれと聞きし）「夜の雨」は、今、現在も、袂を濡らしているというのである。

この「いま」とは、他ならぬ詠み手における現在をさすだろう。だが、当然ながら白居易と詠み手は同時代を生きる人間ではない。とすれば、ひとまず上句と下句には時間的な「断層」があり、それぞれで主語が異なっていると考えるのが妥当なように思われる。

しかし、問題になるのは「いまも」という表現である。和歌を文字通り解するかぎり、かつて白居易の庵に降り注いでいた雨が、時と場所を隔てた今、この私の、袂をも濡らしている、ということになる（もともと、雨が降り注いでいるのか、それとも彼の流す涙がそうさせているのかは分からない）。¹⁷ つまり、先の現代語訳は次のように補って読む必要がある。

（かつて白居易が）草の庵でもの悲しく聞いた夜の雨は、今も（この私の）袂を濡らすしずくであることだ。

時代と場所を隔てて降る、同じ雨。その意味で、上句と下句の主語は同一でなければならぬ。この歌において、白居易と語り手は「水」を媒介として一つに融合しているのだ。

先ほどの李白の詩句は「物」と「廬山」を重ね合わせる機能を帯びていたが、この歌は語り手と白居易とを重ね合わせる機能を持つ。これも同様に「||」の記号を用いて図式化するなら、

語り手∨物||廬山∨白居易||語り手

という関係が成立する。語り手の視線が語り手自身へと回帰したこと、ここに一種の「だまし絵」のような、¹⁸ 奇妙なループが形成されていることが分かる。

この「ループ」から、我々は次のことを読み取ることができる。まず一つは、かつて白居易が置かれていた境涯（隠遁生活および空の観照）は、今の語り手自身のそれに等しいということ。そしてもう一つは、「異なるものを重ね合わせる」というテキスト上の効果において、李白の詩句と語り手の和歌とが同等の機能を果たしているということである。あくまでもテキスト上の機能においてだが、李白の詩と語り

手の和歌は等価なのだ。

以上のように、「盆山記」は短いながらもこれだけ複雑な関係構造を持っている。ところで、和歌によって「語り手||白居易」という関係が成立したとすれば、語り手は「物」を眺めつつも結局のところ自分自身を見ていることになる。彼は、後代の人間（語り手自身や他の人々）が白居易に思いを馳せるまなざしを通じて、自分自身を見ているのである。

それはちょうど、（語り手よりも）後代の人間が語り手自身を見るだろ、うまなざしに等しい。おそらく、彼は「自分が白居易を見るように自分自身が見られること」を欲している。その関係を類比的に表現すれば、

語り手（後代の人間）…白居易||後代の人間…語り手

と表すことができる。¹⁹ それが彼の自己像として妥当であるかどうかはさておき、少なくとも「盆山記」はそうに自分自身を表象している。

つまり、彼の自己イメージがそこに映し出されるところの「物」（廬山）は、ある種の「自己映写装置」として機能している。その意味では、語り手が敬愛する李白や白居易も、自身のイメージを表象するための「素材」以上のものではない。また「物」が「あいすべく、もてあそぶべき姿」をしているのは、物そのものに価値があるという

以上に、まさしくそこに自分自身が映っているからに他ならないのである。²⁰

2 「月の宮人」

つづいて「月の宮人」の読解を行う。冒頭の「おもひでのなきといはば、月と花とのうらみおふみとや成なん」（思い出がないなどと言え、月と花との恨みを負う身となってしまうだろう）という一文は、思い出があると言っているのか、それともないと言っているのか。

文字通りに解するなら、思い出があると言っている。しかし、それは一方で「思い出といえ、月と花を眺めたというぐらいのことしかない」ということもある。思い出がただ「月」と「花」だけというのは、少なくとも世俗的な意味においては、かえって思い出のなさ、希薄さを示しているように思える。彼にとって「おもひで」、つまり過去の記憶はいかなる性質のものなのだろうか。

ここで、和歌世界の伝統における「おもひで」について確認しておく。おそらく、「おもひで」という語によってまず想起されるのは人間関係、とりわけ恋愛に関するものではないだろうか。

心の内に思ことやありけん

見し夢の思出らるる宵ごとに言はぬを知るは涙なりけり

（『後撰和歌集』巻十二 恋四）

木下長嘯子『掬白集』巻六「盆山記」および「月の宮人」読解（水上）

女の許につかはしける

権大納言実国

恋ひ死なば我ゆへとだに思ひ出でよきこそはつらき心なりとも

（『千載和歌集』巻十二 恋歌二）

どちらも動詞の形ではあるが、「思い出」を詠んだ歌である。『後撰集』の歌は恋する人の夢を思い出すたびに流す涙を詠み、『千載集』の歌は自分のせいで死んだのだと思いついてくれ、と呼びかけている。このように、和歌伝統においては恋愛など人間関係に基づいた詠まれ方が印象的である。

とはいえ、「月の宮人」と共通点をもつ和歌も見受けられる。

題しらず

よみ人しらず

散りぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時の思いでにせん

（『古今和歌集』第一 春歌上）

帥前内大臣播磨へまかりけるともにて、川尻を出づる日よみ侍ける

大江正言

思ひでもなき古里の山なれど隠れゆくはあはれなりけり

（『詞花和歌集』巻第十 雑下）

古今集の歌は梅の花という自然の対象との「おもひで」を、詞花集の歌は故郷の山の「おもひで（のなき）」を、それぞれ詠んでいる。

おそらく和歌の伝統的言語世界において、「おもひで」は基本的な人間関係のそれを喚起する。²¹ただ、自然の対象との関係に「おもひで」を見出すというモチーフも、そこからの拡張的用法として認められていたと思われる。自然の対象を詠むことで生活や人間関係を喚起させる、メトニミー的用法といえるだろう。

しかも、

たびのうたとて

中原師宗朝臣

草の庵かりねの床の思ひ出は枕にちかきさをしかの声

（『玉葉和歌集』巻第八 旅歌）

の歌になると、隠者然とした雰囲気さえ漂ってくる。²²ここではメトニミー的要素はほぼ消失しているといつてよい。人間ではなく自然の対象に「おもひで」を見出すというのは、やはり世捨て人の境涯に似つかわしいと思われる。

「月の宮人」は、おそらくこうした世界の延長線上に位置づけることができる。冒頭の一文は、自然の対象との思い出を語ることによって、通常の意味での思い出の不在を際立たせている。

さて、それでは本文の分析に戻る。冒頭の一文に続き、月にまつわ

る奇妙なエピソードが開示される。ある秋の夜、彼が眠らずに「ながめつつ」過ごしていた時のことである。置いてあった大きな甕が、いとも知れぬ間に水で満たされていることに、ふと気づいた。水面には月が映し出され、それがまるで凍った池のような趣をなしている。どうしたことかといぶかしむが、それは、気づかぬうちに流れた自分の涙が、たまりにたまって甕を満たしていたのであった。²³

「自分の涙が甕を満たした」という描写を、文字通りに受けとることはできない。それは詩的世界においてのみ成立する、幻想的仮構である。現実と幻想が入り混じるような詩的境地に、「月の宮人」というテキストは定位している。²⁴

ここで注目すべきは、詩的に仮構されたとおぼしき「涙が甕を満たす」という因果連関が、思い出や記憶の希薄さを如実に示しているという点である。仮に、テキストが主張するように「甕が涙で満たされた」としてみよう。その場合、少なくとも彼はこの夜以外にも、ある程度の日数にわたって泣き暮らしていたことになる。「なきためたる」とあるように、たった一晚の涙で大きな甕が満杯になるとは考えにくい。だが、それらの夜は彼にとってどのような時間だったのか。涙が「落ともおほえぬ」（傍点水上）ものだとなれば、当の本人もその日々を記憶していなかったのである。

おそらく、彼はここで自分の過去を「思い出した」のではないだろう。「（涙で）満水の大かめ」にふと気付いたように、自分の過去もまた、驚きを伴いつつ発見したのである。甕の水に気づくまで、彼は自

分、そのような過去があることを知らなかった。

「想起」されるのではなく、「発見」される過去。やはり、通常の意味において彼には思い出がない。ただ、仮にそれを「風流人」ないし「隠者」の流儀によってパラフレーズするならば、それは「月や花にまつわる思い出がある」ということになる。

彼は月や花のことを思っている。だから、月を眺めているこの夜があり、そして水（涙）で満たされた甕があるなら、そのような夜が以前にも存在したことが導かれる。それは、記憶というよりは一種の推論、確信に近い。少なくとも彼にとっては、今この時において月や花を眺めているという状況そのものが、同様の過去が存在することの証明になる。

表象として記憶を把持するのではなく、反復として過去を生きる。もしくは、現在の状況を起点として過去を創出するというあり方が、ここで示唆されている。「月の宮人」において、「おもひで」はこのように特異なあり方をしている。

こうした存在態度は、本文中のつぎの和歌によってさらに際だってくる。

ながむればあやにこひしく物ぞ思ふわがさきの世や月のみやひと

「月のみやひと」というからには、ここで『竹取物語』のかぐや姫が想起され、下地となっているのは間違いない。歌意としては、「（月

木下長嘯子『掬白集』巻六「盆山記」および「月の宮人」読解（水上）

を）眺めていると、不思議に恋しく物思いをしてしまう。きっと私の

前世は（あのかぐや姫のごとく）月の住人だったに違いない」となる。

もちろん、彼は月の住人ではありえない。が、ここで思い出（のなさ）が拡張されて、前世における記憶（のなさ）として詠まれている点に注意したい。和歌の主張するところは奇妙である。「本来ならば月を恋しく思ういわれなどないのに、なぜか恋しく思えてしまう。それは、きっと、前世において私が月に縁のある人間、つまり月の住人だったからだ」というのだ。まるでプラトンの想起説にも似た推論によって、月に対する自分の思いを根拠づけている。「月の住人だった」という過去を措定すれば、現在の自分の（月や花に対する）思いが説明可能だというのだ（あるいは、月や花に対する思い入れの強さを、「思い出せはしないが確かに存在する過去」という比喻によって表象しているのだろう）。それは、ほかならぬ風流人としての自負でもあるだろう。自分と対象との関係は、すでに前世において決定されているほどに深い、というのである。

ここから、我々は本文と和歌に共通のスキーマを抽出することができる。それは、「不在の過去が現在を規定している」、もしくは「現在のありようを起点として、（記憶としては）不在の過去が創出される」というありかたである。これが果たして過去の「発見」なのか、「創造」なのかは分からない。おそらく、その両方なのだろう。そもそも彼には（通常の意味において）「おもひで」がないからである。

彼は、直接想起されるような過去（前世）の記憶表象を持たない。

だが、現在において湧き上がる感情の発露、もしくは対象への詩情という形で、彼は過去を現在において反復し、それを生きているのである。「月や花との思い出」とは、そうした不在の過去に付与された詩的概念にほかならない。矛盾した言い方になるが、彼は、「今、ここにある過去」を生きている。

月や花に思いを寄せる風流人ないし隠者であるというその一点において、彼は「過去（記憶）—現在」という通常の時間的構図を抜けている。記憶の把持によってではなく、行為の反復として過去を持つという、通常とは別様の「人格」がここでは描きだされている。

「月の宮人」の語り手にとって、過去と現在は循環的に絡み合っている。現在が過去を創出し、そしてその過去が現在を規定している。実際に、彼が甕に涙を泣きためていたのか、本当に彼の前世が月の住人であったのかは、問題ではない。重要なのは、「この今」におけるありようなのだ。彼が今ここにおいて月や花に思いを寄せる人間であるというその限りにおいて、記憶表象は必要ないし、また不要ですらない。

この存在態度は、もう一首の和歌において「来世」、つまり未来にまで拡張される。

またはみじのこの世の秋とおもふよりさらぬわかれぞ月になしき

この歌は、「もう見ることのないこの現世の秋だと思って月を眺めていると、避けることのできない別れ（死）がづらいことだ」と解す

ことができるだろう。前の歌と同様に、『竹取物語』の世界を基調としていえると思われる。愛する人間でもなく、地位や財産でもなく、「秋」や「月」という自然の対象と別れがたく思うという点に、彼の隠者ぶりが表れている。

月を見ることでのつる、現世に対する執着。ここで語られているのはあくまでも「死」の概念であり、直接的に「死後」、つまり来世が語られているわけではない。しかし、テキストには「さきの世」と「この世」を詠んだ二首の和歌が並置されている。ならば、その後には「のちの世」があつてしかるべきだろう。テキストはそうした余白を作り出している。では来世において、彼はどのような生を生きるのか。

月の住人だったという前世の因縁によって（あるいはそのような前世を仮構して）、月を恋しく思う彼のことである。おそらく来世においても、現世での月への執着が因縁となつて、何らかの思い入れを抱くのではないか。現世への執着は、（現世を過去世とする）来世で不可解な思い入れを生じさせる、「種子」となるだろう。彼の自然に対する態度は、それほど強度を備えている。しかもその場合、彼は前世（つまり現世）の記憶をすっかりなくしていて、自分の思い入れの不可解さについて思案しているに違いないのである。

現世において、彼は風流人として、隠者としての世界を生きている。その生は死によって限界を迎え、彼の人格も消え去るだろう。だが、さきの和歌は現世と来世を結びつけるような余韻を帯びつつ、月を愛

でている。現世における執着が、来世における彼のありようを、かすかにではあるが予感させる。

それは、「来世でもこうありたい」という願望のようなものではない。来世のために現世で月を愛でているのではないからだ。彼はただ、この今において月を愛でているにすぎない。だが、この今における彼の存在態度、その特異な性質は、過去を、そして未来を貫くような強度を備えている。

このような現在では、それが有限の長さでしかないとしてもいや、そうであるからこそ、永遠と呼ばれるにふさわしい。なぜなら、永遠とは時間的な永続を意味するのではないからである。²⁸むしろ、永遠は有限の中にこそある。「月の宮人」において、テキストは彼の「永遠の生」を描出しえている。

おわりに

さて以上で論じたように、「盆山記」と「月の宮人」は短いながらも語り手の自己イメージを如実にテキスト上へ表出している。要約していえば、「盆山記」は「自己が他人にどう見られたいか」を、「月の宮人」は「自己がどのようにありたいか」を示していた、といえるだろう。たとえば、「盆山記」などは一読すると単に古典の教養を披露しつつ自身の「玩物」癖を語っているだけにも思える。が、そのような評価は『挙白集』を読む上ではいったん留保しておいた方がよいのではないか。²⁹

また、これまで木下長嘯子の研究は伝記的研究を基本としつつ、二条派歌壇との関係や、蕉風俳諧との関連において論じられる場合が多かったと見受けられる。こうした文学史的研究の重要性は疑うべくもないが、テキストそのものの読解もまた重要であると思われる。

注

- 1 ただし、特定の人物といっても書簡文などではなく、何らかの読者が想定された内容になっている。
- 2 『近世歌文集 上』（上野洋三・松野陽一校注岩波書店 1996年）。ただし、底本として採られているのは『山家記』として独立に出版された版本である。
- 3 嶋中道則「長嘯子『山家記私注（一）』（東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学 33号 1992年）
- 4 「木下長嘯子の『盆山記』と芭蕉の『鹿島詣』（国文学 解釈と教材の研究 第29巻5月号 1984年）
- 5 あるいは、これらを散文とはみなさずに「和歌に添えられた長い詞書」とすることもできる。ただし、「盆山記」にせよ「月の宮人」にせよ、巻一〜五ではなく巻六に収録されていることを鑑みれば、少なくとも『挙白集』というテキストにおいては「和歌も含んだ散文」、つまり「歌文」とみなしてよいだろう。
- 6 『挙白集竹葉抄』に指摘がある。
- 7 読み下しは『李太白詩歌全解』（大野實之助 早稲田大学出版部 1980年）によった。ただし、一部私意により改めている。
- 8 「此石」のいささかなるとあるように、語り手（長嘯子）と「物」との大小関係は明らかであろう。ただし、ここでは物理的な大小だけでなく、「所有／被所有」の関係も表すものとしておく。
- 9 なお、白居易はこうしたオブジェを愛玩する趣味の第一人者と目されている。詳しくは小財陽平氏の論考「近世文人の愛石趣味―柴野栗山を中心に」（『国文学研究』一四九号 2006年 早稲田大学国文学会）を参照。
- 10 『角川古語大辞典』（中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 角川書店 1982年）の「ぬし」の項を参照。
- 11 注7と同様、廬山が白居易より巨大であることは明らかである。ただし、ここでも大小の不等号には「地域／居住者」という関係も含めるものとする。
- 12 同『竹葉抄』に指摘がある。なお、俊成・定家をはじめ本詩に影響を受けて詠まれた和歌は数多く、「盆山記」もその伝統に連なっているといえる。ただし、どの歌も基本的には白居易の境涯への共感がみられるものの、本歌ほど露骨に自身と白

居易を重ね合わせた例は稀である。

- 13 読み下しは『新釈漢文大系 白氏文集 四』岡村繁 明治書院1990.11によった。ただし、一部私意により改めている。

- 14 白居易は「香山居士」の号をもち、仏教や老荘思想に傾倒していたとされる。

- 15 同『角川古語辞典』の「とほそ」の項を参照。

- 16 「空」という概念は、サンスクリット語の「シューニヤ」の意識である。もともと「虚ろ、空っぽ」ぐらゐの意味であるという。「空」の解釈については様々あるが、基本的には「諸法無我」、つまりこの世のありとあらゆる現象には実体が存在しないということである。

- 17 （オブジェの）「廬山」の上に彼の涙が落ちたとすれば、それはそのまま廬山に降る雨であろう。ただし、前掲の小財氏によれば、こうした盆山を愛する場合、上から水をかけて「雨が降った」と興じるのが定石だったという。

- 18 ここで「だまし絵」といっているのは、エッシャーの「滝」のような絵画を指す。この絵は「あたかも水が低い所から高い所に流れるように見える」ことで著名であるが、「盆山記」にみられる関係も、この「だまし絵」に似た効果を發揮している。

- 19 ここで筆者は、「盆山記」における「物」をラカンの精神分析における「対象a」とのアナロジーで捉えている。「対象a」という概念は論者によって解釈が分かれ、またラカン自身も常に二貫した意味を与えて用いてはいないが、ここでは新宮一成氏の解釈に従っておく。

- 氏によれば『ラカンの精神分析』新宮一成 講談社 1995.11）、対象aとは「黄金数」として理解が可能である。黄金数とは無限に1が続く連分数であり、平方根を用いて表すと $\frac{1+\sqrt{5}}{2}$ （もしくは $\frac{1-\sqrt{5}}{2}$ ）である。新宮氏は「わたし \equiv x、他人 \equiv y、みんな \equiv x+y」という表記を与えた上で、人間同士の関係を黄金比で解説する。

- ここで、「私にとつての他人」を x と、「普遍者（みんな）にとつての私」を x と、 $\frac{x}{x+y} \equiv$ 理性 \equiv 分数によって表記する。そして、それらを等号で結んだ $\frac{x}{x+y} \equiv \frac{x}{x+y}$ が、人間関係を構成する基本式となる。つまり、「私にとつての他人」が「普遍者にとつての私」に等しい。このとき x が対象a、つまり $x=y=a$ であるが、 $\frac{x}{x+y} = \frac{x}{x+x} = \frac{1}{2}$ の式に $\frac{x}{x+y} = a$ 、つまり $y=a$ を代入すると、 $\frac{ax}{x+ax} = \frac{x}{x+ax}$ 、つまり $a = \frac{1}{1+a}$ となり、正の解をとれば先の $\frac{1+\sqrt{5}}{2}$ になる。

- この「私にとつての他人」が「みんなにとつての私」に等しいという構図は、本論中で定式化した「語り手にとつての白居易」が「後代の人々にとつての語り手」に等しいという図式とパラレルであろう。

- 20 嶋中道則氏は、長嘯子の「玩物」癖について「建造物はむろんのこと、自然物から、こうしたひさびさに至るまで、愛称を付すことを楽しんで」おり、しかもその命名は「和漢の古典籍を発想の基盤に置いている」とした上で、そのような命名は「教養をともにする仲間との交感の上に」成立していたと論じている（木下長嘯子の「隠」について、『言語と文芸』八十一号 1975.10）。筆者も基本的には氏と同意見であるが、「盆山記」の場合はそうした仲間同士の交感を基調としつつも、それに加えて自己観照としての側面が認められるのではない。

- 21 「歌」とは歌枕大辞典（久保田淳・馬場あき子編 角川書店 1998.9）の「思い出づ」の項でも、やはり『後撰集』の辺りから「すなわち昔の恋人をはじめ、過去の出来事や人について詠んだ例が圧倒的」とされる。

- 22 和歌伝統を論じる例歌として『玉葉集』を引用するのは適当でないかもしれないが、長嘯子は為兼や正徹など冷泉派系統の歌人に私淑していたとされる。

- 23 実際には、これは「臉が涙で溢れた」ということの比喩的表現に過ぎないのかもしれない。しかし、あくまでもテクスト世界の詩的イメージにおいて、やはり「大きな甕が涙で満たされた」のである。

- 24 これは『學白集』の散文の多くに共通する特徴だと思われる。『學白集』は完全な事実の記述でもなく、また純粹な空想の産物でもない。現実の法則と詩的言語の法則とが拮抗するようなテクストが『學白集』であるといえる。

- 25 自己の出自を語る場面で、かぐや姫は「そのが身は、この国の人にもあらず、月の都の人なり」と語る。なお、引用本文は新日本古典文学大系「竹取物語 伊勢物語」堀内秀晃・秋山虔校注 岩波書店 1997.11によった。

- 26 ソクラテス＝プラトンは、人間が知識を習得するばあい、それは新たに獲得されるのではなく、前世において既知であるが、忘れ去られてしまったものの「思い出し」、つまり想起なのだと考えていた。詳しくはプラトンの『メノン』（藤沢令夫訳 岩波書店 1994.10）などを参照。

- 27 ここでいう「種子」とは法相宗、つまり唯識論における用語である。唯識において、人が行為する、つまり業を重ねると、第八識である阿頼那識に「種子」が植え付けられ、これが来世における輪廻の因となる。テクストが直接に唯識思想を参照しているとは思えないが、ここでは「過去」「現在」「未来」という輪廻について最も厳密な理論体系を備えている唯識の用語を借用しておく。用語については『仏教語大辞典』（中村元 東京書籍 2010.7）などを参照。

- 28 ウィットゲンシュタインは永遠について次のように云う。「死は人生のできごとではない。ひとは死を体験しない。永遠を時間的な永続としてではなく、無時間性と解するならば、現在に生きるものは永遠に生きるものである。視野のうちに視野の限界は現れないように、生もまた、終わりをもたない」（命題6.4311『論理哲学論考』野矢茂樹訳 岩波書店 2003.8）彼がやたらに自己の古典的教養を文章に盛り込みたがることは、鈴木淳氏が「山

家記」を評して「およそ並べ得る限りの先蹤を片端から取込んでいるとの感が強い」〔木下長嘯子隠士論〕、「文学」第二卷・第一号（2011）と指摘する通りである。実際、筆者も『萃白集』を読むと同様の印象を抱く。

30 長嘯子と二条派歌壇との関連について、近年の研究としては岡本聡氏の「木下長嘯子の二条派批判」（近世初期文芸 第十八号）2001.12）がある。